



平成27年度 太平洋いわし類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成28年4月～7月)のポイント

海況

黒潮は、4月上旬にC型^(※1)、6月以降はN型^(※1)になる。沿岸水温は、潮岬以西が「**平年並**」^(※2)～「**高め**」^(※2)、熊野灘～伊豆諸島北部海域では4月は「**平年並**」～「**高め**」、5月以降は「**平年並**」～「**やや低め**」^(※2)、鹿島灘～常磐南部海域が「**平年並**」～「**やや低め**」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

C型：八丈島の南を通過

N型：八丈島の北を通過、南端が北緯33度以北

別添中央ブロック海況予報の図1を御参照ください。

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、

やや低め=平年値-1.0℃程度、高め=平年値+1.5℃程度

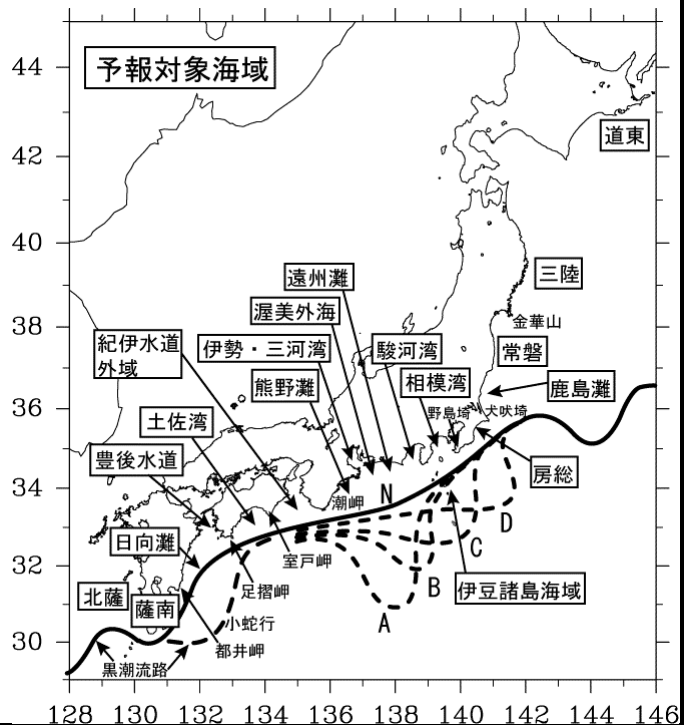
漁況(来遊量予測)

マイワシ

1歳魚主体に前年並～上回る海域が多い。

カタクチイワシ

前年並～下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター 中央水産研究所

担当：市橋、川崎

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2016年4月～7月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬～潮岬沖では、小規模な擾乱はあるものの接岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・4月上旬にはB型からC型になる。
- ・6月以降は、N型となる。
- ・房総沖では、5月までは離接岸を繰り返すが、6月以降は接岸傾向になる。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、黒潮の離接岸による一時的な暖水波及がある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、概ね冷水域となるが、一時的な暖水波及がある。
- ・伊豆諸島南部海域は、5月までは冷水域に、6月以降は概ね暖水域に覆われる。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・房総沖での黒潮の離接岸に伴い暖水が波及する。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、4月は「平年並」～「高め」で推移する。5月以降は、「平年並」～「やや低め」で推移し、暖水波及に伴い「高め」となることがある。
- ・伊豆諸島南部海域は、5月までは「低め」、6月以降は概ね「高め」で推移する。
- ・鹿島灘～常磐南部海域は、「平年並」～「やや低め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2015年12月～2016年3月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・12月上旬、B型になった。
- ・12月下旬、C型になった。
- ・1月中旬以降は、一時的にB・C型となったが、概ねN型基調で推移した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、12月は接岸、1月～2月は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。

◎潮岬以西

- ・1月中旬に都井岬沖に小蛇行が形成され、足摺岬～室戸岬沖を東進し、2月中旬に潮岬沖を通過した。
- ・以降は、都井岬～潮岬沖では「接岸」～「やや離岸」で推移した。

◎潮岬以東

- ・12月上旬～中旬、黒潮内側反流が形成され、熊野灘～遠州灘に暖水が波及した。
- ・1月上旬、熊野灘に黒潮から暖水が波及した。
- ・1月中旬～2月上旬、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に覆われた。
- ・2月中旬～下旬、潮岬沖を小蛇行が通過したことに伴い、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域に暖水が波及した。
- ・伊豆諸島南部海域は、12月下旬からは概ね冷水域に覆われた。1月中旬以降は、一時的に冷水域に覆われることもあるが、概ね黒潮の南の暖水域に覆われた。
- ・野島埼沖での黒潮は、12月は接岸、1月は離岸、2月以降は離接岸を繰り返した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・12月～1月、沖合域に黒潮系暖水が見られた。
- ・2月、南下した冷水の影響が全域で強く見られた。
- ・3月、冷水の影響が残っているが、鹿島灘沖合域には黒潮系暖水が波及した。

現況 (2016年3月18日現在)

(1) 黒潮

- ・ N型流路である。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎ 潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「かなり離岸」、足摺岬～潮岬沖で「接岸」～「やや離岸」している。

◎ 潮岬以東

- ・ 熊野灘～伊豆諸島北部海域に、黒潮から暖水が波及している。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、黒潮の南の暖水域に覆われている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響が弱まった。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

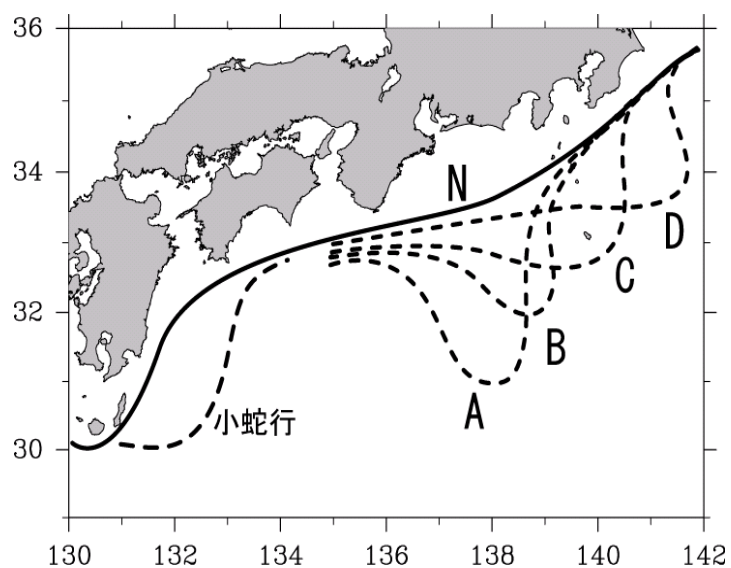


図1 黒潮流型の分類

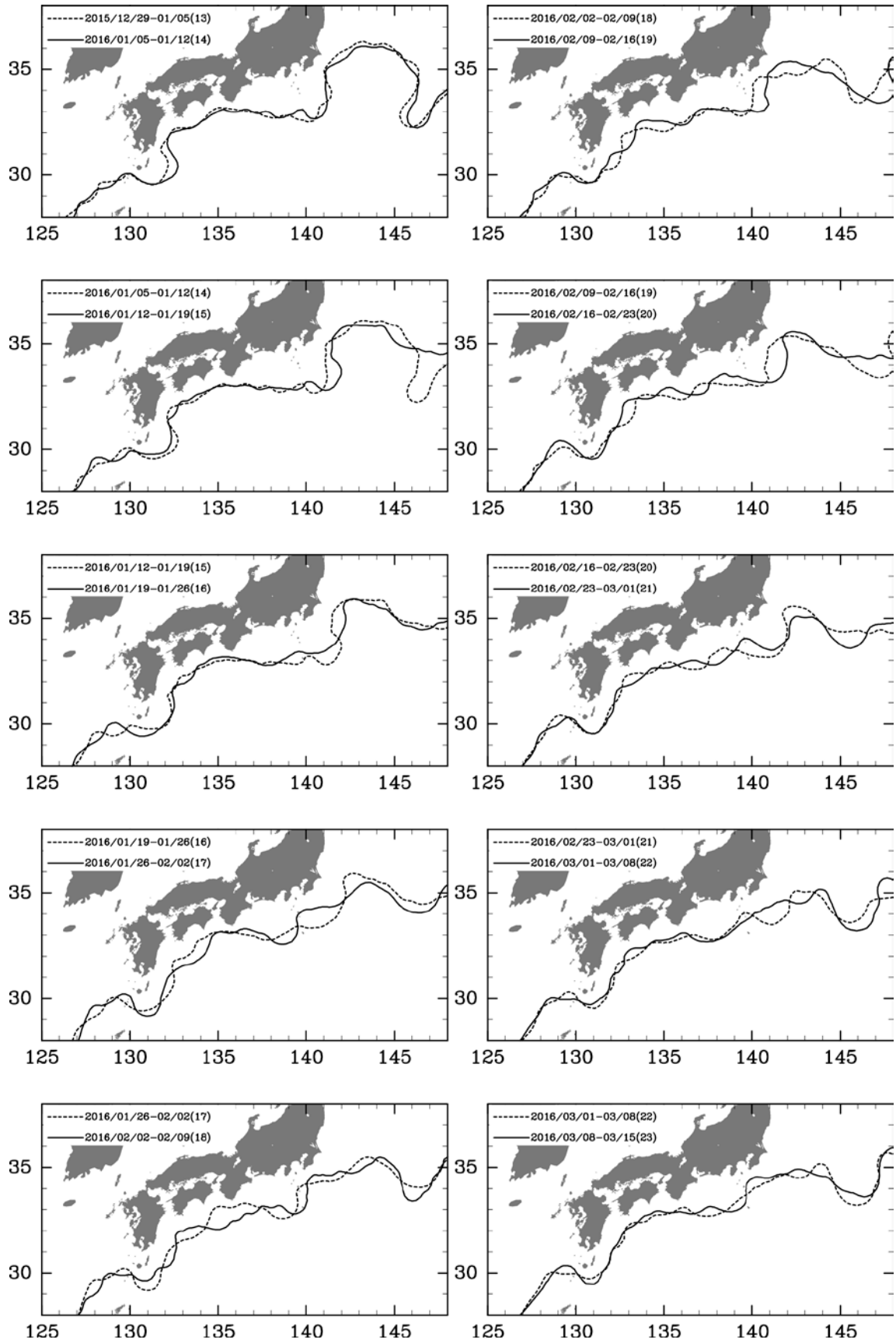


図2 黒潮流軸のパターン

(2016年1月~3月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年4月～7月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2016（平成28）年級群）、1歳魚（2015（平成27）年級群）、
2歳魚（2014（平成26）年級群）、3歳（2013（平成25）年級群）以上。
年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 渥美外海～駿河湾のマシラス（船曳網）

- (1) 来遊量：渥美外海では高水準であった前年並。遠州灘～駿河湾では好漁であった前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：6月まで漁獲される。

2. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩、薩南海域では前年並。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並～下回る。豊後水道南部東側では前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では前年を上回る。紀伊水道外域西部では前年並～上回る。紀伊水道外域東部および熊野灘では前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：北薩、薩南では4月は16 cm～18 cm（1歳魚）、5月以降は8 cm～13 cm（0歳魚）。日向灘では5月までは18 cm～20 cm（1歳以上）、6月以降は11 cm～13 cm（0歳魚）。豊後水道南部では7 cm～12 cm（0歳魚）主体に1歳魚が混じる。宿毛湾、土佐湾では7 cm～12 cm前後（0歳魚）と16 cm～20 cm前後（1歳以上）。紀伊水道外域～熊野灘では13 cm以上（1歳以上）。

3. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- (1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では前年並。駿河湾、相模湾では前年並～上回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁獲される。駿河湾のまき網では散発的な漁場形成。
- (3) 魚体：伊勢・三河湾では12 cm以下（0歳魚）主体に13 cm以上（1歳魚）が混じる。駿河湾、相模湾では13 cm～16 cm（1歳魚）主体に18 cm～22 cm（2歳魚）も漁獲される。期後半には14 cm以下（0歳魚）も漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、犬吠埼周辺～常磐南部海域が主漁場となり、5月以降は三陸南部海域も漁場となる。仙台湾～三陸南部海域の定置網では5月以降漁獲される。
- (3) 魚体：14 cm～18 cm前後（1歳魚）主体に19 cm～21 cm前後（2歳魚）、20 cm以上（3歳以上）が混じる。

漁況の経過（2015年12月～2016年2月）および見通し（2016年4月～7月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1970年代後半に増加し、1980年代は1千万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って減少して1994年に100万トンを下回り、1999年までは70万トン～90万トン台で推移した後再び減少し、2002年以降2007年まで10万トン台の低い水準で推移した。その後2008年～2014年に比較的良好な加入が続いたことと漁獲圧が低下したことにより増加し、2014年は70万トン以上になったと推定されている。

2013年級群（3歳魚）以上の年級は、2012年級群、2013年級群とも2015年7月時点での推定された加入量（72億尾、49億尾）は2010年級群、2011年級群（79億尾、90億尾）を下回るものの、3歳魚以上としての漁獲状況は前年同期を上回っている。残存資源は減少しているものの、今期も3歳以上として漁獲対象になり、来遊量は前年並と考えられる。

2014年級群(2歳魚)は、0歳魚時点で、秋季北西太平洋中層トロール調査(中央水研)による道東海域～千島沖の亜寒帯域現存量が119億尾と、2011年級～2013年級を上回り、2010年(153億尾)に次ぐ水準となるなど高い値を示した。未成魚越冬群資源量指数は2,065と、2010年級群(3,374)に次ぐ高い水準であった。各地で0歳魚としての漁獲量が多く、三重県～日向灘では2014年夏季以降近年にない好漁となった。これらのことから2014年級群の加入量水準は高いと考えられ、2015年7月時点では加入量119億尾と評価されている。今期は2歳魚として漁獲対象となり、来遊量は前年を上回ると考えられる。

2015年級群(1歳魚)に対応する産卵量は160兆粒(2015年6月までの暫定値)と、2014年(452兆粒)を下回ったものの、2011年以降の高い水準を維持している。マシラスは、前期までの漁獲量が特に渥美外海～駿河湾で前年を大きく上回るなど、多く出現している。幼魚は、日向灘～土佐湾の沿岸域で、好漁だった前年を上回る漁獲がみられた。沖合域の調査では、2015年5月～6月の移行域幼稚魚調査(中央水研)に基づく加入量指数が101.5と、近年では2012年～2014年(123.2～158.0)を下回ったことから、7月の評価では中程度の水準(71億尾)と評価した。しかし2015年9月～10月に実施した秋季北西太平洋浮魚調査では、亜寒帯域に濃密な分布がみとめられ、推定された現存尾数は2010年～2014年を大きく上回った。このことから2015年級群の沖合加入群の加入量水準は極めて高いと考えられる。なお、常磐～房総海域における未成魚越冬群指数は2月末時点で860(暫定値、千葉県水産技術センター)であり、2010年以降では2011年に次ぐ低い水準となっているが、魚種選択のため北部まき網漁業による漁獲量が少なかったこと、近年の未成魚越冬群の漁獲盛期が3月～4月と遅れていることを勘案すると、現時点では2015年級群の豊度を反映していないと考えられる。

2016年級群(0歳魚)は、現時点でその水準を予測することはできない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マシラス

渥美外海では、きわめて好漁であった2015年級群が産卵群として期待できること、調査船調査等においてマシラスの混入が確認されていることから、来遊量は高水準であった前年並と見込まれる。遠州灘～駿河湾でも生殖腺のよく発達した産卵親魚が漁獲されているほか、周辺海域の相模湾でもマシラス主体の漁がみられていることから、来遊量は前年を上回ると見込まれる。

2) 未成魚・成魚

(1) 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

・来遊量：北薩、薩南海域では、5月以降主体となる0歳魚(2016年級群)の予測は困難であるが、産卵親魚と思われる1歳魚(2015年級群)が前年並に漁獲されていることから、前年並と見込まれる。日向灘では、1歳(2015年級群)以上の産卵親魚は、今期の来遊状況と関係がみられる前期までの8月～12月の宿毛湾の漁獲が前年を上回ったものの、同じく関係がみられる10月～12月熊野灘の漁獲量は前年を下回っており、かつ日向灘における2月末までの漁況は前年を下回っていることから、前年を下回ると考えられる。6月以降主体となる0歳魚は、日向灘におけるマシラスの漁獲が前年を下回っていること、成魚の漁獲も前年を下回っていることから、前年を下回る。豊後水道南部西側では、1月～2月の漁獲量が1歳魚主体に近年では高く今後も期待できるが、前年に比較すれば少ないことから、前年並～下回ると予測する。豊後水道南部では、12月～2月の漁獲量が皆無であったことから、前年を下回る。なお、日向灘～豊後水道南部の来遊量はいずれも前年並か、前年を下回ると予測されるが、これは前年同期(2015年4月～7月)の来遊量が近年になく極めて多かったことによる。宿毛湾、土佐湾では、これまでのマシラス漁および小型まき網量の漁況から、0歳魚(2016年級群)の来遊は前年を下回ると考えられる。一方、1歳(2015年級群)以上の漁況は前年を上回っていることから、来遊量は前年を上回る。紀伊水道外域西部では、近年

の資源水準が比較的高いと推測されることから来遊量は前年並～上回る。紀伊水道外域東部では、12月～2月のまき網の漁獲がなかったが、資源水準は増加傾向にあり、2013年～2015年の春期マイワシ漁は好漁がつづいていることから、来遊量は前年を上回る。熊野灘では、まとまった来遊がみられ12月～2月の漁獲量は1981年以降最高であったことから、来遊量は前年を上回る。

- ・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：今期の漁獲対象は、この冬春季に発生した0歳魚、および1歳以上の越冬後の未成魚・成魚である。北薩、薩南海域では4月は16 cm～18 cmの1歳魚、5月以降は8 cm～13 cmの0歳魚が、日向灘では5月までは18 cm～20 cmの1歳以上、6月以降は11 cm～13 cmの0歳魚が、豊後水道南部では6 cm～12 cmの0歳魚が、宿毛湾、土佐湾では7 cm～12 cm前後の0歳魚が、紀伊水道外域～熊野灘では13 cm以上の1歳以上が、それぞれ主体となる。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- ・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、近年の傾向から1歳魚（2015年級群）の来遊はわずかと考えられ、漁獲の主体となる0歳魚（2016年級群）の来遊は夏以降であることから、今期の来遊量は前年並と考えられる。駿河湾、相模湾では、主体となる1歳魚（2015年級群）、2歳魚（2014年級群）ともに高い水準の年級群と考えられることから、来遊量は前年を上回ると考えられる。
- ・漁期・漁場：近年の傾向から、期を通じて漁獲される。
- ・魚体：伊勢・三河湾ではこの冬春季に発生した12 cm以下の0歳魚が主体となり、13 cm以上の1歳魚が混じる。駿河湾、相模湾では13 cm～16 cmの1歳魚が主体で18 cm～22 cmの2歳以上も漁獲され、期後半には14 cm以下の0歳魚も漁獲される。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- ・来遊量：2015年12月～2016年2月までの北部まき網による漁獲量は約16千トンと、前年同期（約2.7千トン）を大きく上回った。各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2015年級群）主体で2歳（2014年級群）以上が混じる。1歳魚（2015年級群）は、12月～2月の房総～常磐海域のまき網漁場ではまとまった漁獲はみられていないが、仙台湾～三陸海域定置網では2、3歳魚とともにまとめて漁獲されており、調査船調査による加入量水準は高いと考えられていることから、来遊量は前年を上回ると考えられる。2歳魚（2014年級群）は、12月～2月の三陸～常磐海域のまき網や定置網でまとめて漁獲されていることから、今期も引き続き漁獲対象となり来遊量は前年を上回ると考えられる。3歳魚（2013年級群）以上も漁獲量は前年を上回っており、資源は減少しているものの来遊量は前年並と考えられる。

全体として来遊量は前年を上回ると考えられる。

- ・漁期・漁場：まき網の漁場は、犬吠埼周辺～常磐南部海域において、期前半は断続的に形成され、期後半は越冬後の北上群を対象にまとまった形成となる。仙台湾～三陸南部海域の定置網では、近年の傾向から、北上群を対象に5月以降漁獲される。道東海域ではまとまった漁獲はない。
- ・魚体：14 cm～17 cm前後の1歳魚が主体となり、これに18 cm～20 cm前後の2歳魚、20 cm以上の3歳以上が混じる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年4月～7月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2016（平成28）年級群）、1歳魚（2015（平成27）年級群）、
2歳魚（2014（平成26）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～土佐湾では予測が困難。渥美外海～駿河湾では前年を下回る。相模湾では前年並～上回る。鹿島灘～常磐南部では前年を下回る。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～豊後水道西側では前年並。豊後水道東側では前年を下回る。土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10cm～12cm（1歳魚・2歳魚）主体。期後半に7cm以下（0歳魚）も漁獲される。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘では前年を下回る。伊勢・三河湾～渥美外海では前年並。駿河湾では前年並～下回る。相模湾では前年並。

(2) 漁期・漁場：全期間。

(3) 魚体：8cm～14cm（1歳魚・2歳魚）主体。伊勢・三河湾～渥美外海で期後半に7cm以下（0歳魚）が主体となる。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総～三陸南部海域では前年を下回る。三陸北部、道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：常磐・房総海域は6月まで。三陸南部海域の定置網は5月以降。

(3) 魚体：9cm～11cmの1歳魚主体。

漁況の経過（2015年12月～2016年2月）および見通し（2016年4月～7月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の推定資源量は、1998（平成10）年から2010（平成22）年まで70万トン～150万トン、2011（平成23）年から2013年（平成25年）まで48万トン～56万トンで推移し、2014（平成26）年は62万トンと推定された。資源水準は過去30年で中位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2014年級群（2歳魚）は、2014年漁期に西日本海域で多獲されたが、その後の漁獲に反映されていない。2015年の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研、6月～7月）および同年の秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）において、10cm以上の魚体で漁獲され、現存量、有漁点（漁獲のあった調査点）CPUEはいずれも低水準であった。2015年6月の道東海域流し網調査（釧路水試）において採集された1歳魚（2014年級群）のCPUEは前年を上回ったものの低水準であった。また、2014年11月～2015年6月

の常磐・房総海域での11cm以下（1歳魚主体）の漁獲量は5千トンで、前年（16千トン）を下回った。これらの動向から、2014年級群は最近10年の中で見れば低水準と考えられ、漁獲の主体とはならない。

2015年級群（1歳魚）は、2015年の伊勢湾以東におけるシラス漁況が好調で漁獲量は前年を上回った。0歳魚を主対象とする2015年秋季の房総沿岸2そうまきの漁獲量は前年を下回った。2015年6月の道東海域流し網調査（釧路水試）において0歳魚（2015年級群）は採集されなかった。沖合域では、2015年の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研、6月～7月）における9cm以下の推定現存尾数が2001年以降最低であり、2015年の秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）における9cm以下の有漁点CPUEは、前年を上回ったものの非常に低い水準であった。以上の状況から、2015年級群のうち沖合回遊群は低水準と考えられるが、沿岸加入群は、現段階では総合的な水準判断が困難である。

2016年級群（0歳魚）は、2016年2月までの沿岸域のシラス漁況で前年を上回った海域が多いものの、現時点ではその水準を判断できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

西薩～土佐湾では、今後2歳魚主体の大型成魚の来遊は少ないと予測されるが、シラスの漁場形成については予測が困難である。渥美外海では、予測期間の黒潮流路が当該海域へのシラスの来遊がある程度期待されるC型～N型で推移すると考えられるが、2016年2月までに大型成魚の来遊が見られなかったことから、来遊量は前年を下回る。遠州灘～駿河湾では、前年は暖水波及などの海況の好条件によりシラス漁況が好調であったが、カタクチイワシ親魚量は減少傾向にあり、今期は前年以上のシラス加入は見込めないことから、前年を下回ると予測される。相模湾では、近年の漁獲傾向および2016年1月～3月のシラス分布調査結果から、今期の漁獲主体も例年どおりカタクチシラスと考えられる。カタクチシラスは大型成魚の資源が依然低水準と推定され、来遊量は前年並と見込まれるが、マシラスは資源動向から3月～4月に前年以上の来遊が期待できる。以上のことから、今期の来遊水準は前年を上回る。鹿島灘～常磐南部では、2月～5月における海況がシラスの生息・来遊にとって不利な「低め基調」の水温で推移すると予測されていること、2016年2月までの常磐・房総海域における未成魚・成魚の漁獲量は前年を下回り、大型成魚もほとんど見られていないことから、前年を下回ると予測される。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

北薩～薩南海域では、2015年12月～2016年2月の来遊水準は高く、2015年秋季のシラス漁も比較的好調であったことから、好調であった前年並と予測される。日向灘では、近年、常磐・房総海域から南下する大型成魚の来遊はほとんどないこと、沿岸で成長・加入する群れ（沿岸加入群）の指標となる2015年10月～12月の宿毛湾のまき網漁獲量は前年を大きく上回っていないことから、低調であった前年並と予測される。豊後水道西側では、2016年1月～2月の未成魚・成魚およびシラス漁獲量が前年を下回ったことから、予測期間中の来遊量も少ないと考えられるが、前年4月～7月の漁獲量は極めて低い水準であったことから、総じて低水準であった前年並と予測される。豊後水道東側では、豊後水道外海から来遊するとみられる2歳魚（2014年級群）の資源量が前年と同程度と評価されているが、周辺海域における2015年8月

～11月のカタクチシラスおよび0歳魚（2015年級群）の漁獲量の推移から1歳魚（2015年級群）の来遊量は少ないと考えられ、全体として来遊量は前年を下回ると予測される。宿毛湾～土佐湾では、冬季の土佐湾におけるシラス漁および宿毛湾における小型まき網漁の漁況経過から、低調であった前年並～上回ると予測される。紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲はないと考えられる。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

熊野灘では、沖合を回遊する大型成魚の来遊が3月上旬まで見られないこと、沿岸加入群の漁獲も低調で推移していることから、前年を下回ると予測される。伊勢・三河湾～渥美外海では、漁獲の主体となる2016年級群の来遊量が前年には及ばないものの一定水準見込まれること、渥美外海底びき網等の情報でカエリサイズの魚群が散見されていることから、前年並と予測される。駿河湾では、常磐・房総海域から南下する大型成魚が漁獲対象となるが、近年の親魚資源の減少傾向から前年以上の来遊は見込めないため、前年並～下回ると予測される。相模湾では、漁獲の主体となる2015年級群（1歳魚）および2014年級群（2歳魚）の沿岸加入群の資源水準が前年と同程度であると考えられることから前年並と予測される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

常磐・房総海域における2015年12月～2016年2月の漁獲量（千葉県、茨城県、福島県の合計）は2.5千トンで、前年同期の6千トンを大きく下回り、漁獲物は、10cm未満（2015年級群）が主体であった。例年、前年漁期の小型成魚が翌年に大型成魚となって再来遊するが、今期の大型成魚の来遊量は前年を下回ると予測されており、2016年2月までの2歳魚（2014年級群）の漁獲量は極めて少なかった。また、沖合回遊群と考えられる1歳魚（2015年級群）の現存尾数は、2015年の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研、6月～7月）および同年の秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）から非常に低い水準であると推定された。さらに、2015年9月以降に房総周辺海域において沿岸加入群の漁獲量は前年を下回った。以上の状況から、来遊量は前年を下回ると予測される。漁場および体長については近年の傾向および最近の漁獲物の体長から判断した。三陸南部海域の定置網では例年5月から水揚げがあるが、各年級群の資源状態およびこれまでの漁況経過から、来遊水準は前年を下回ると予測される。三陸北部、道東海域の定置網では、予測期間中の来遊は前年同様、ほとんどないと考えられる。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関)
三重県水産研究所	国立研究開発法人 水産総合研究センター 中央水産研究所